

《第8回日本文化人類学会賞受賞記念論文》

『原野の人生』への長い道のり

——フィールドワークはどんな意味で直接経験なのか——

菅原和孝*

南部アフリカ狩猟採集民グイのもとの30余年にわたる調査に基づいて、フィールドワークがどんな意味で直接経験であるのかを考える。出発点はゴッフマンの「直接的共在」である。ヨクナパトーフア譚と呼ばれるフォークナーの作品群は、独特な時間性を提起している点で、過去の出来事を素材にした民族誌を書くことに手がかりを与える。私が追求する民族誌記述の戦略は、口頭言語を身ぶりとして捉え、語りの表情を明らかにすることである。6つの談話分析の事例から以下の7点を語りの表情として抽出した。(1) 親族呼称が間投詞として使用される際に、代替不可能な語の表情が際立つ。(2) 共在の場にはグイに特有なハビトゥスと間身体性が滲透している。(3) 語り手の身ぶりによって儀礼の本質を象徴する身体配列が現成する。(4) 複数の語りの相互参照により現実の多面的な相貌が開示される。(5) 語り手と調査者は、その相互間で、あるいはかれらと言及対象との間で、文脈に応じて変化する仲間性を投網しあう。(6) 「話体」は、個々の語り手の修辭的な方策によってだけでなく、複数の語り手に跨がる相互行為の構造によっても規定される。それによって実存的な問題に身を処する人びとの一般的態度が照らされる。(7) 語り手がある出来事を忘却していることを露呈するとき、その欠落の周囲に、事実の間の連結と記憶の相互的な補完とが浮かびあがる。

以上の分析に基づき、民族誌と小説は人びとの生の形を描き出す点で共通しているが、世界との関わりにおいて大きな違いがあることを論じる。民族誌記述は、実在した談話の語り手(発話原点)との指標的な隣接性に基礎を置く。その隣接性を成り立たせる連結こそ、調査者と現地の人びととの直接的共在である。言い換えれば、民族誌の生命は、人びとの生の事実性をもつ、汲めども尽きない「豊かさ」に源をもつ。

キーワード：直接的共在, グイ／ガナ, 語りの表情, 身体配列, 仲間性

目次

I 出発点	2 語の表情
II ヨクナパトーフア郡の虚構民族誌	3 身体接触と身体配列
1 3つの家系集団	4 怒りの表情と仲間性の投網
2 実験的な方法の特徴	5 相互行為の構造としての「話体」
3 民族誌と小説を隔てるものは何か	6 忘却——「不在の穴」の輪郭
III グイ／ガナにおける語りの表情	IV 過去とは何か／時間とは何か——討論
1 民族誌の背景となる基礎情報	1 流れ／沈下の隠喩から離脱することは可

* 京都大学 E-mail: kazuyoshi.sugawara@gmail.com

能か

2 民族誌と小説、ふたたび

3 現実世界の「豊かさ」

I 出発点

本稿のタイトルに含まれる『原野の人生』とは、私がいつか書き上げたいことを願っている民族誌のタイトルである¹⁾。私は、1982年以来、足かけ31年にわたって、いわゆる「ブッシュマン」の一員である南部アフリカ狩猟採集民グイ (gǀui) とガナ (gǀáná) のもとで調査を行ってきた²⁾。私の住みこんできた集団はほとんどグイによって構成されるが、ガナにも知己は多い。両集団に言及する必要がある場合には、「グイ／ガナ」と表記する。1994年から現在に至るまで、おもにグイの年長者の協力を得て、かれら³⁾の生活史に関わる語りを収録してきた。それらの断片は個別的な主題に沿って公表してきたが、語りから浮かびあがる生活世界の全体像を描き出すことは今後の私に課せられた責務である。本稿では、形成途上にあるこの民族誌の基本的なモチーフを予告することを通じて、文化人類学のフィールドワークがいかなる意味で身体の直接経験であるのかを考えてみたい。

まず、自らのフィールドワークの原点に遡行する。それは1974年から1980年まで断続的に続けた宮崎県幸島におけるニホンザル・ハナレオスの個体追跡であった〔菅原 1980〕。島の宿泊棟で私が耽読していた本がゴッフマンの『行為と演技』であった。

相互行為 interaction (すなわち対面相互行為) は、大まかに、双方が直接身体的に相手の面前にあるとき、それぞれの行為主体が〔与え合う〕相互的影響と定義しておこう。

〔ゴッフマン 1974: 18、括弧も原文のまま〕

このじつにありふれた相互行為の定義が脳裡に深く焼きついた。「直接身体的に相手の面前にある」こと、すなわち「直接的な共在」(immediate co-presence)こそが、私にとっての人類学の出発点であり、その後の自分の研究すべての座標軸であり続けた。

だが、本稿の主題をより鮮明に照らすためには、もっと深い過去へ遡行する必要がある。大学に入学して間もなく、私にフォークナーのすばらしさを教えてくれたのは、クラスメートの寺嶋秀明であった。フォークナーは、ミシシッピ州ヨクナパトーフア郡ジェファソンという架空の町を舞台にしてたくさんの小説を書き、その全体はヨクナパトーフア^{サーガ}と呼ばれる。次章では、彼の小説世界が、民族誌を書くという営為を再考するうえで貴重なヒントを与えることを論じる。青春時代の寺嶋と私は、自分たちの魂を驚づかみにした何ものかを「民族誌」の名で呼ぶような教養を持ちあわせてはいなかったが、われわれは民族誌ととても類縁性の深い言説の磁場に引き寄せられていたのだと思える。

II ヨクナパトーフア郡の虚構民族誌

本章では、ヨクナパトーフア・サーガのなかから2作を選び、その概略を紹介したうえで、フォークナーの構築した虚構世界が民族誌にとってもつ意義を論じる。その2作とは、もっとも前衛的な手法で書かれた『響きと怒り』(原著刊1931) および最高傑作との評価が定着している『アブサロム、アブサロム!』(原著刊1936)である。

1 3つの家系集団

上記2作の登場人物たちは、コンプソン家、

サトペン家、コールドフィールド家という3つの家系集団に属する。コンプソン家の家長はジェーソンであり、その父親はサトペン家の家長トーマスがただ一人気を許した友人であった。サトペン家とコールドフィールド家は、トーマスを介して姻戚関係をもつ。

『響きと怒り』はコンプソン家に焦点をあてる〔フォークナー 1969〕。ジェーソンの子どもたちは、年齢順にクエンティン (1891-1910)、ジェーソン (父と同名)、キャディー、ベンの三男一女である。物語の軸は、1928年4月6日から8日までの3日間の出来事であり、そこに18年前の1910年6月2日ハーバード大学生の長男クエンティンが自殺した当日の彼の想念と寄宿舎の同室者シュリーヴとの対話が挿入される。4章で構成され、各章はそれぞれ括弧内に示す異なった視点から叙述される。第1章「1928年4月7日」(「白痴」のベン)、第2章「1910年6月2日」(クエンティン)、第3章「1928年4月6日」(次男ジェーソン)、第4章「1928年4月8日」(作者つまり「神」の視点)という具合である。

『アブサロム、アブサロム!』は、クエンティン、その父ジェーソン、そしてシュリーヴの視点から再構成された謎の男トーマス・サトペン (1807-1869) の一代記である〔フォークナー 1968〕。どこの馬の骨ともわからぬ男がインディアンから土地をだまし取り、多くの黒人奴隷を伴ってジェファソンに移住し、家門創設の野望に燃え、最終的には破滅する物語である。トーマスはグッドヒュー・コールドフィールドの弱みにつけこんで彼の長女エレン (1817-1863) と政略結婚をして、ヘンリー (1839-1909) とジューディス (1841-1884) の一男一女をもうける。長じてヘンリーは都会に遊学し、そこでトーマスの隠し子チャールズと親友になる。兄からチャールズを紹介されたジューディスは彼と恋仲になるが、身もとを調べたトーマスは二人の関係が近親相姦であることに気づき、その仲を引き裂く。トーマスの過

去は謎に包まれているが、前妻と結婚していた時期に黒人女と関係をもち女兒をもうけていたらしい。最終的には、黒人の寄食者ウォッシュ・ジョーンズの孫娘ミリーに子を産ませ、産褥の床にある彼女に侮辱のこぼを浴びせる。それを聞いたウォッシュはトーマスを草刈り鎌で殺害し、孫娘と新生児をも惨殺する。

2 実験的な方法の特徴

フォークナーの独特な方法論の特徴を4点にまとめる。①斜字体による文の有標化：おもに「内言」と「フラッシュバック」を表現することに使われるが、それ以外にも多用され、独特なリズム感を生む。②文体の前衛的な実験：句読点や引用符を脱落させ、難解で晦渋な長文を紡ぐ。一人称単数の“I”を小文字の“i”で表記することもこうした実験精神の表れである。③ポリフォニー：過去の出来事は複数の語り手の視点から多面的に照らされ、いわゆる「羅生門効果」を増幅させる。④虚構世界は作者自身にとっても汲み尽くせない奥行きをもつ：この点は③と表裏一体である。作者は本篇を書き終わってから、物語の背後にまだいくつもの謎が潜んでいることに気づいたのだろう。そこで、「年譜」「系譜」「地図」といった、本篇それ自体とは形式を異にする「共テキスト」(co-text)を付加することになる。初版刊行から10年も経った1946年に刊行された作品集『ポータブル・フォークナー』に所収された『響きと怒り』には長大な付録が加えられた。

このような方法によって構築される世界の相貌は読者に強烈な印象を刻みつける。ディープ・サウスに特有な人間の無慈悲さと堅忍不拔、独特な感情生活の厚み、長い時間をかけて沈殿する実存の根源的選択、そして「黒人」という他者の圧倒的な存在感、等々。だが、何にも増して、フォークナーを20世紀文学のなかで傑出した存在とした達成は、他に類のない時間性の構築である。なかでも過激な手法は、『響きと怒り』——とくにベンのある1日を克明に

辿る第1章で追求された。訳者解説によれば、ベンの想念の流れは127回におよぶ時間の跳躍によって寸断されているという。それを重層的な時間と呼ぶことも可能だが、過去と現在のすべての瞬間が同等に存在しているという意味では、「無時間」が具現されているのかもしれない。本稿の最終章でこの問題に立ち還る。

3 民族誌と小説を隔てるものは何か

私たちは、ヨクナパトーフア・サーガを、19世紀後半から20世紀初頭のディープ・サウスを描く「民族誌もどき」として読むことができる。共テクストを参照する労を厭いさえしなければ、登場人物を相互に結びつける系譜関係だけでなく各人物の生没年までも確定することができる。ヨクナパトーフア郡の「ただ一人の所有者にして占有者」⁴¹ フォークナーは、その世界に住まう住人たち一人ひとりの来歴と個性と社会関係を入念に用意したのである。ここで提起される設問はいたって単純である。私がもしカラハリ砂漠を舞台に『原野の人生』という長大な民族誌を書き上げることができたとして、それは、ヨクナパトーフア・サーガとどこが違うのか？「フォークナーは彼の意識内にうかぶ表象としての絵空事を書いたが、私はありのままの現実を書いた」という素朴な区別は疑わしい。フォークナーに出会うよりも前に私が傾倒していた大江健三郎は書いている。

作家が、この現実世界のなかに実在するところの経験を、表現しようとする。小説の制作において具体化される、この世界の実在の感覚において、作家は、その世界のそとに立っての展望をえるのであってはならない。〔中略〕作家は、卵のなかにもぐりこんだまま、その卵をゆでようとしている不思議なコックのごとき人間なのである。〔後略〕〔大江1974：19 強調は原文のまま〕

フォークナーの虚構世界もまた、彼自身の現

実世界に根をおろし、妻子との日々のやりとり、近隣の農場主や町で出会う友人たちとの社交、あるいは黒人の使用人たちとの関わりを不可欠のリソースとしていたはずである。民族誌と関連の深い問題として、とくに「黒人という他者」に作者がどのようなまなざしを向けていたかに注目してみよう。『響きと怒り』最終章の後半に、女召使いのディルシーがベンを連れて教会に行くシーンがある。牧師がよその町から招いた小人の説教師の熱弁が会衆を揺り動かす。「人声と拍手のさ中に、ベンは、その青く澄んだやさしい凝視に夢中になって、坐り続けていた。ディルシーはそのそばで、直立不動の姿勢のまま、神の子羊の血の思い出に鍛えられコツンと声をしのばせながら、泣いていた」〔フォークナー 1969：303〕⁵¹。この描写を読むだけで、私たちは、フォークナーが黒人たちに敬意と共感の入りまじったまなざしを注いでいたことを推測できる。近年の文化人類学において、ペンテコステ派教会における憑依が少なからぬ文化人類学者の関心を惹いている状況を、上のような描写は予示していたようにも見える〔Csordas 2002；野澤 2010〕。ちなみに、初版から10年後に加えられた付録はいわゆる「登場人物紹介」なのだが、次のように終わっている。「ディルシー 彼らは耐え忍んだ」。

もちろん、一般的には小説が叙述する出来事は「本当にあったこと」ではない。だが、ひるがえって、民族誌の場合はどうか。グイ／ガナのような無文字社会においては、口頭言語によって表象される遠い過去の出来事が「本当にあった」ことなのだと確証する客観的証拠を確保することは、ほとんど不可能である。民族誌を小説から隔てる主要な根拠は、ある過去の一時点において、人類学者と現地の人びととがたがいに「直接身体的に相手の面前に」あったという事実を具体的な資料として呈示できるということである。それは論文のなかで事例記述の形で公開される。あるいは、録音された肉声または録画された映像という媒体によって、「直

接的な共在」のシミュラクルを、開かれたコミュニケーションの回路に投げこむことができる。要するに、民族誌という言説空間を満たす語り（発話）と、「現地の人」（発話原点）とを繋ぐ経路が明示されうる、ということである。しかし、こうした経験主義的な証拠が確保されたとしても、心的表象の外化として語りを捉えるかぎり、それは過去の出来事の忠実な写像ではない、という懐疑論を乗り越えることはできない。この限界を突き破る手がかりになるのが、メルロ＝ポンティの思考である。

話される言葉は真の身ぶりであり、それは身ぶりがその意味を内に含むのと同じようにその意味を内に含んでいる。このことがコミュニケーションを可能にしている。他の人の言葉を理解するためには、彼の語彙や統辞があらかじめ私に知られていなければならないのは明らかだ。しかし、このことは、単語群がそれらと連合した表象を私の中に喚び起こすように働いたり、それらが寄り集まって話者のもともとの表象を私の中に再現する、などといったことを意味するわけではない。〔英語版を参考に邦訳を一部改変〕〔メルロ＝ポンティ 1967：214；Merleau-Ponty 1962：213〕

ここに凝縮されているメルロ＝ポンティの洞察を導きの糸として、私は、「表情をおびた身ぶり」として語りを了解する途を模索することになった。次章では、ガイ／ガナのいくつかの談話を取り上げて、語りの表情を具体的に照らすことを試みる。

III ガイ／ガナにおける語りの表情

1 民族誌の背景となる基礎情報

ガイ／ガナは、ボツワナがイギリス保護領であった時代に設立された「中央カラハリ動物保護区」の中で、ほぼ自律的な狩猟採集経済に依存した遊動生活を送っていた。生業の基盤はお

もに女性が行う採集活動によって支えられていた〔田中 1990 (1971)；今村 2010〕。毒矢を用いる伝統的な弓矢猟でもっともよく捕獲された獲物は「食う－物」（コーホ *qx'óō-xó*）と呼ばれる7種類の大型・中型偶蹄類であった〔Tanaka 1996〕。1979年より政府の「遠隔地開発計画」によって定住化し、保護区の西端に人口500～600人規模の集落カデ（Xade）が生まれた。1997年に発動された「再定住計画」により移住を強いられ、ガナもまじえ1,000人を超える集住村ニューカデに現在に至るまで暮らしている〔田中 1994；丸山 2010〕。

「ブッシュマン」の言語は、非コエ語グループとコエ語グループ（Khôe-speaking group）という二つの系統に分かれる。ガイとガナは後者に属し、日本語とよく似た主語＋目的語＋述語という統辞構造が支配的だが、語順は多様な変異が許される。両者は非常に近縁な方言集団であり、音韻構造にシステムティックな差異があるものの、おたがいの話すことを完璧に理解できる。ガイ語では4種類のクリック吸入音と13種類の伴奏的特徴音が弁別されるので、合計52種類のクリック子音が産出される〔Nakagawa 1996〕。文法的には人称代名詞の精緻さが特筆に値する〔中川 1993〕。一般的に、人称代名詞の意味場は、話者あるいは聞き手それぞれの「包含／排除」および「最小／非最小成員数」という3つの次元によって組織される。ガイ語では、これに性の次元が加わり、さらに成員数は「単数／双数／複数」の3つの値をとることにより、ほぼ完備したパラダイムを構成する⁶⁾。

2 語の表情

まず、もっとも基礎的な、意味論的な水準における「語の表情」について考えよう。言語の代替不可能な表情を典型的に具現する品詞は間投詞である。次に示す事例の背景を説明する。ガイは、1970年代初頭までホローハ（*!hórō-xà*）と名づけられる男性成人式を行っていた。ホローハとは「アフリカオオノガン（デウ *g#éú*）

の冠毛をもつ」という意味である。デウは、グイの食物禁忌において中心的な位置を占め、中年を過ぎた男しか食うことを許されない。このように年長者と幼児しか食えない肉をショモ (*súmú*) という。なぜこの儀礼に「デウの冠毛」を意味する名前がついているのか、という私の質問に、調査助手キレーホが興味ぶかい釈義を与えた [菅原 2004a : 144-145]。

【事例1】「うなり板で呼ぶ」(1994年9月27日)

この儀礼のもっとも重要な装置は「うなり板」(*g/|áá-ī*) を巡回させて奇妙な音を出すことであった。儀礼を終えた少年は年長者から「おまえが年長者になってデウを罫でつかまえたら、うなり板を鳴らしておれたちを呼べ」と教えられる。いよいよデウを食おうと決意する日がおとずれると、彼はキャンプのそばの木の上に丸焼きにしたデウを隠し、深夜にひそかにそこへ戻りうなり板を鳴らす。それを聞きつけた老人たちは叫ぶ。「エヘー、パーバ・エ (おじいちゃんよ：間投詞) ! おれを呼んでいる! ほら、あれが! おれが昔おまえに話したとおりで! 『おれに隠したりするなよ、おれを呼んでおれにくれ』 そう言ったとおりに、彼はあの木でおれに話している! アオッ、パーバ・エ! ああ言ってるぞ! おれを呼んでるぞ!」老人たちは闇の中を音のする方向へ走り、デウの肉に舌鼓を打つ。

上記の事例で注目したいのが、「パーバ・エ!」(*pāábá é*) という間投詞である。「パーバ」は、単純化していえば、祖父またはオジに対して孫またはオイ/メイが呼びかける親族呼称であり [Ōno 1996 : 128]⁷⁾、「エ」は呼びかけの末尾に現れる形態素 (日本語の「よ」にあたる) である。上記の例では、デウを捕獲してうなり板を鳴らす中年男に対して老人が「おじいちゃんよ!」(または「おじちゃんよ!」) と叫んでいるわけだ。これと似ているが、年長者に語りを乞うと、「エヘイ、パーバ・エ、おま

えに話してやろう」といった言いまわしをよく耳にする。「パーバ・エ」の代わりに「おばあちゃんよ (おばちゃんよ)」を意味する「マー・エ」(*mā é*) または「ママ・エ」(*māmā é*) 使うこともよくある。私は長い間、それらを間投詞としてカタカナで翻訳し続けてきたが、なぜ親族呼称が使われるのか、その理由がわからなかった。調査助手キレーホとあだ名にまつわるやりとりをしたことによって、やっと理解がおとずれた。拙著に掲載した記述をкаいつまんで再録する。

キレーホは途方もないおしゃべりである。あるとき田中二郎と私は「大口たたき」を意味するパープーという形容詞を知った。田中はキレーホのことを「パープー」と呼ぶようになった。田中が日本に帰った後、私は、キレーホが田中に言及するとき「パープー」と呼んでいるのに気づき、注意した。「タナカがおまえのことをパープーと呼んだのだから、パープーとはおまえの名だ。」キレーホは答えた、「おれとタナカはドワオ (交叉い) ところだから、おたがいに同じ名前呼びあうのだ。」 [菅原 2004b : 56-57より要約]

すなわち親しい者どうしの間では、「呼称逆転」(address inversion) が可能なのだ⁸⁾。私が年長者にインタビューをするとき、彼(女)から見れば、私は孫(またはオイ)のような若造である(少なくとも昔はそうだった)。だから私は彼(女)を「じいちゃん」(またはオジちゃん)あるいは「ばあちゃん」(またはオバちゃん)と呼ぶと想定される。それが逆転されるので、年長者は、私に向かって親しみをこめて「じいちゃん」「ばあちゃん」と呼びかけるのである。母親が自分の子どもにむかって「ギエ・エ」(*giē é*) とか複数ならば「ギエーハーキョ・エ」(*giē-xá-ciò é*) つまり「かあちゃんよ」とか「かあちゃんたち-あんたたちよ」と呼びかけるのも同じ理屈である。このような納得感が得られ

たということこそ、ゲイ語の表情に私の身体がゆっくりとなじんできたことの現れといえるだろう。

3 身体接触と身体配列

(1) 身体接触

初めての調査で、私はゲイのキャンプにおいて居住者の近接関係と身体接触の様態を定量的に分析した [菅原 1984]。このとき、かれらが行住坐臥において同性の仲間と身体を触れあわせる傾向が非常に強いことに深い印象をうけた。以下の事例は調査者自身がこうした社会的傾性に巻きこまれる様を示している。

【事例2】語り手と調査者の身体接触 (1996年8月26日)

(a) 「すべてを話せ」

私と調査助手キレーホは定住地カデの奥まったキャンプに暮らすゲイの人びとを訪ねた。この一族の最年長男性 KK は若い頃カオギという女性を妻にめとった。インタビューが始まってから約10分が経過した時点でのセグメントを示す⁹⁾。

SG: あんたはー どうやってカオギを、妻ー妻を探し探し探し、で、どのように彼女を見つけ、で、めとったのか? (KK: 笑い) すべてのおれに話せ。

KK: アッ! なんだった? アハハハハハ (KK 笑いながら両腕を伸ばし、彼の右にすわっているキレーホの左上腕を右手で、左にすわっている私の右肩を左手で押さえる) エー、おれは彼女を見つけ、で、彼女を愛し、で、食べ物を彼女に乞い、で、食べ物を彼女に乞い、で、彼女に乞い、で、彼女に話して、お話しして、お話しした。

(b) 「彼は正しかった」

以下は、インタビュー開始後、約30分が経過した時点のセグメントである。

SG: 以前、おれはキューマの語りを聞いていたら、キューマはあんたの息子が死んだこと

をおれに話した。

KK: エー

SG: あんたの息子はこんなふうにして(上体を後ろに反り返らせる)自分で歩かなかった。

KK: そいつ、そいつ、ママ・エ [間投詞、「おばさん」または「おばあちゃん」の意、前節参照] そいつだよ。つまり、キューマがあそこでおまえに話したとき、彼は正しかった。 (KK 右手をさしのべ私の右膝を掌で押さえ小刻みに叩くような動作をする)

この2つのセグメントからわかることは、ゲイの年長者と私とがコミュニケーションを交わすその手前で、すでにある種の間身体性が成立しているということである。不躰に質問を投げかける私に対して、笑いながら親しげに手をさしのべて肩をつかむ。あるいは、私の膝にさわりながら遠い過去に起きた彼の長男の悲惨な死の経緯について語りだす。ゲイとの共在から湧きあがってくる居心地の良さの根っこには、かれらの身体に染みついた社交のハビトゥスが横たわっている。

(b) については、もう一つ重要な背景を指摘する必要がある。年長者の語りの収録を開始した1994年の調査が終盤にさしかかったとき、私は卓越した語りの技芸を誇るゲイの年長者キューマから多くの興味ぶかい逸話を聞いた [菅原 2006]。そのなかに KK の長男は邪術の犠牲になって死んだという話があった。その病状はきわめて特異で、体じゅうがつっぱって、手足が動かなくなったという。私は、体を反り返らせてこの「つっぱり病」を実演してみせたのだ。KK は即座に理解し、「キューマの語った通りだ」と受けあった。キューマは1996年の初頭に病を得て急逝し、このインタビューは彼の死から約半年後に行われた。密接な関係がはりめぐらされた共同体のなかで複数の人たちから語りを採取するとき、調査者は、ある過去の出来事に関する一つの語りを別の人によってなされた同じ出来事にまつわる語りと相互参照し

うる。このとき彼（女）は、現実の多面的な相を描き出すという、フォークナーが追求した方法を期せずして実践しているのである。

(2) 身体配列

年長者の語りの収録を開始してから5年後の1999年に、私は、小屋に侵入してきたライオンに妻を殺された愚かな男に関する語りと遭遇し、そこから「身体配列」(body configuration)というアイデアを得た。人間が経験する社会的な出来事の基底には、参加者の身体間の特有な配置、およびそれと結びついた独特な相互行為のパターンがある。こうした身体配列は「その出来事を想起し語りなおそうとするさいには明瞭に主題化されないものであるが、経験のもっとも原初的な次元において、参加者の思考と実践を動機づけている」[菅原 2002a: 61]。さらに、儀礼の場においては、日常生活ではめったに経験されることのないような身体配列が参加者に制度的に課せられることがある。

【事例3】「こんなふうにおまえの股ぐらを開いて」(1994年9月26日)

このインタビューが成立した背景をまず説明する。老人NKは、調査助手タブーカの父親である。数日前に私とタブーカともう1人の調査助手カーカの3人でNKのキャンプを訪れ、彼の父親が牝ライオンに殺された顛末から始まる長い談話を収録した。最後に男性成人式ホローハについて水を向けると、「妻がいるから話せない」と断られた。ホローハは男だけの秘密なので、けっして女に聞かせてはならないのである。私は「それじゃいつかおれのキャンプに来て話してくれ」とNKに頼んでから暇を告げた。何日か経ってNKがひょっこり現れたとき、折り悪しく調査助手はみな不在であったから、私が拙い^{つたな}質問を発し続けることになった。NKの語りの最中に私は頻繁に「フーン」「ホォ」といった相づちの音声を発しているが、すべて省略する。

(NKの左横にSGはすわり、右手で指向性マイク

ロフォンを握ってNKに向けている)

SG: 前、キレーホがおれに話した。デウ【【事例1】を参照】をー治療するときにはー男の人はガーの薬 [g//áàtsòò ショモのタブーを解除するために使う薬] を作って……

NK: 彼の言ったとおりだ。それでおまえに話したんだよ。彼は昔ーカリナレ [NKが入門者として参与したホローハの儀礼を主宰した年長者の名] はガーの薬をおれたちにくれた。[中略]で、おまえがデウを食うときには (-) デウの肉の中にふりかけて、で、それから口に入れて、別の男の人が唾をかけて、「プッププッ」と言っ、おまえもそんなふうに言っ、「プッププッ」とおまえは言っ。で、彼はおまえの口に入れる。彼はそれから向き直り、「食べ物薬」をふりかける。彼の手の中で。で、おまえに食べさせる。で、それからおまえ [今まで「おまえ」と「彼」はそれぞれ青年と年長者を指示していたが、ここから代名詞の指示対象が入れ替わり「おまえ」が年長者を、「彼」が青年を指示するようになった] はこんなふうにする(あぐらをかいてすわっていたが、右手を地面につけ右膝を立てる)。おまえはこんなふうにして、彼は出る(右手で体重を支え腰を浮かす)。このようなやり方で立って(両手を地面につけ腰を完全に上げる) こういう姿勢をとって(両脚を開き上体をかがめて立ち両腕を左右に垂らす) こんなふうにおまえの股ぐらを開いて(上体をかがめたまま股を開き両手は左右の膝近くに垂らされる) こうやって [彼は] そこから出る(両手を股の間に振り入れる)。彼はそれから出るだろう(同じ動作を繰り返す)。で、それからおまえはそこを^{つたな}通って立つ。こっちへ通って立つ(くると体の向きを変えてSGの右斜め前方で正対し上体をかがめ股を広げ立つ)。彼は再びここから出るだろう(広げた股の間に両手を振り入れる)。で、それから行って立つ(上体を起こし右手を上^{つたな}に振り

上げる)。おまえはそれから彼に言う。「さあすわって食べる」(向き直り上体をかがめ左腕を地面に向けて伸ばす)。そう言うと、彼はすわり、で、食う(両手でズボンの両膝をたくしあげSGの右隣にはすかいにすわる)。

【事例1】で示したキレーホの語りへの私の言及をNKが承認したことにも、上で指摘した他者の談話への参照可能性が鮮明に現れている。何よりも重要なのは、語り手の実演によってそれまで私が知らなかった身体配列のパターンがこの場に突如出現したことである。青年が年長者の股の間をくぐり抜けるという相互行為パターンは日常生活ではけっして見られない。これこそ年長者と青年との関係性の本質をことばの真の意味で象徴する身体配列なのである。ヴァレラたちが提唱したenact(現成する)という用語ほど、この談話の場で起きたことを正確に把握する概念はあるまい[Varela et al. 1991]¹⁰⁾。過去の出来事を語ることは脳のどこかに貯蔵された心的表象としての記憶を言語媒体へと自動的にコード化することではない。語る行為を通じて過去を照らしなおす運動のなかで、ある身体配列を演じることが、「今ここ」の場に出来事の相貌を現成するのである。

4 怒りの表情と仲間性の投網

語ることそれ自体が表情をおびた身ぶりである。以下に示す事例は本論のこの中心的な主張をもっとも鮮明に例証するものである。1996年8月に調査に出発するよりかなり前に、私は、当時『世界の社会福祉』という大規模な叢書を編集していた和崎春日氏から「ブッシュマンの障害者福祉について書いてくれ」という依頼を受けていたため、この年とその翌年の調査では心身障害に関する語りを意識的に集めようとしていた[菅原 2000]。

【事例4】「ガマが私たちが殺した」(1997年8月)
この年の5月に、ボツワナ政府は1986年の

閣議決定から着々と準備し続けていた再定住計画(relocation program)を実行に移した。カデの住人は再定住村ニューカデに波状的に移住し、私が訪れたときには、前述のKK一族だけがカデに残っていた。語り手Xpはガナであり、KKの長男の妻(ガナ)の父方のオバにあたる。彼女の一人息子NAはインタビュー時点で約35歳であった。まったくことばを話さずいつも微笑んですわっている穏やかな知的障害者である。Xpはカデから東北東に約120キロメートル離れたギョムの出身である。NAが5～6歳になった頃、彼女はギョムで初めて「狂気の発作を起こす」(ズワズラ *dzùwādzùrà*) 経験をした。小康を得てから一族と共にカデの近くに移住してきたが、間もなく再びズワズラになった(1974～5年頃と推定される)。その後は平穏に暮らしているが今でも酒を飲むと「心が逸れる」と周囲の人びとは評する[菅原 1998a: 282-292]。

Xp: あんたが言ったように、ガマ(g||ámá 神霊)が私たち[男女2人]を殺した。

SG: エヘーイ

Xp: 人びとが集まっている所、人びとがたくさん暮らしていて、こんなにたくさん的人数がいても、こんなふうなものを生んではないのに、私たち[男女2人]はこんなふうなものを生んだ。

SG: ーンフ

Xp: つまりガマは私たち[男女2人]を殺して、私たち[男女2人]を殺したのよ。

SG: エヘーイ

ビデオ映像を見れば一目瞭然なのだが、Xpの口ぶりから感知される表情は「怒り」以外の何ものでもない。その責任の一端は私にある。拙著に「ゆっくん」という愛称で登場する私の長男は自閉症という知的障害をもっているため[菅原 1999]、私はXpとNAの母子に特別な親しみを感じていた。しかし、この前年に「障害の語り」を集め始めた当初、私はこの母子

をよく知る男たちから衝撃的な見解を聞いた。NA と同じ歳であるというガナの男は語った。「彼は生まれたときはきれいだった。小さいときはしゃべりもしたし、おれといっしょに玩具おもちゃの弓矢で小鳥を射て遊んだりもした。だが、彼がかなり大きくなったころ〔12～3歳と推定される〕母親がズワズラになり自分の尿を飲ませたりしたので、彼は「愚かになった」(*piripiràhá*) のだ。」さらに Xp の腹違いの弟にあたる壮年男性も同じようなことを語った。「生まれたときは良かったのに、母親が心を取り替えられたとき息子に食べ物を食べさせていたら、息子も心を取り替えられてしまった。」私は無謀にも彼女にこうした「差別的な」見解をぶつけてみたのである(だが、さすがに「尿」のことは言わなかった)。彼女は、息子が幼い頃からことばをまったく理解しなかったことを、憤然として強調した。ここで決定的な役割を果たしているのが、一人称の人称代名詞である。発話文を文法要素と対応させて以下に示す¹¹⁾。

g||ámá-bì *qχ'ó* *ʔák'ēmà* */qχ'ū'ū*
 神霊-PNG PAST PRN 殺す
 -(3/m/sg/nom) (大過去) (1/c/dl/acc/inc)

「神様が昔、私とおまえの男女二人をひどい目に遭わせた」

ʔák'ēbì *khòà* *ʔii-zì* *xó-zì* *ʔábá*
 PRN のような -PGN もの -PGN 生む
 (1/c/dl/nom/inc) -(3/f/pl/acc) -(3/f/pl/acc)

「私とおまえの男女二人は、こんなふうに見えるものたちを生んだ」

Xp は、男女のペア(双数)を表す包含形(つまり発話者と聞き手の双方を含む)代名詞アケビ、あるいはその対格アケマを用いて、彼女自身と私の二人を指示したのである。私の最初の調査のときから、ゆっくんが障害児であることは、私と近いガイ／ガナの人びとに知れわたった。しかも、このインタビューの4年前には家族と共にフィールドを訪れていたので、彼

女はゆっくんのことをよく知っていた。だからこそ、障害者の親として同じように苦勞している自分と私とを包含形の「私とおまえの男女二人」で括ったのである。この瞬間の私の気分は両価感情的アンビヴァレントなものであった。私は彼女が私を「仲間」扱いしてくれたことに心を揺さぶられながらも、障害者を「もの」と言い捨てる酷薄さに無然とした。

その後、私は、行為空間の構造に埋めこまれた感情的な実存としてのサルとヒトの連続性を明らかにすることに長い時間を費やした。5年後に上梓した『感情の猿＝人』では陳述的な言語行為を感情的な行為として捉えることを試みた。そのとき軸になった分析概念が「仲間性の投網」であった。たとえば、〈記述する〉とか〈評価する〉といった「断言的な」(assertive)発話内行為はつねに話者＝聞き手＝言及対象の三項関係のなかで発せられる。話者と聞き手とがそれぞれ {話者／聞き手} {話者／言及対象} {聞き手／言及対象} のどの対を相対的に強い仲間性で括るのかに応じて陳述が含意する評価値は変わるので、次に聞き手がターンを取るときの発話もこの評価値の変動に依存する〔菅原2002b: 281-282〕。

「仲間性の投網」の理論を適用するなら、上の事例は次のように分析できる。Xp の息子 NA を話題にするかぎり、われわれの間の相互行為において言及対象が NA であることは明らかだ。だが、ここにはゆっくんという非明示的な言及対象が潜んでいる。日本人である私もガナの Xp も「親子関係」をもっとも根源的な仲間性として捉えていることは自明である。だが、Xp が彼女自身と私を包含形アケビ(または対格アケマ)で括ることによって {Xp/SG} に強い仲間性を投網すると相即して、言及対象としての {NA + ゆっくん} は共に知的障害者という「もの」へ追いやられたのである。調査者と語り手が相互行為するそのプロセスに応じて、両者が現成する「人称空間」¹²⁾ が複雑に裁ちなおされることは注目に値する。このこと

も語りに独特な表情を帯びさせる要因となっているのである。

5 相互行為の構造としての「話体」

この節では、「語りの表情」をより根源的に捉えるために、新しい概念を導入する。それが「文体」あるいは「様式」としてのスタイルである。メルロ＝ポンティの簡潔な定義にしたがえば、スタイルとは画家や作家が「世界に住みつき、世界に対処する或る類型的な仕方」あるいは「彼の世界への根本的な関わり方を示す何本かの力線」[メルロ＝ポンティ 1979: 86-87, 106] を受肉させた言語の形式である。私は、この「作家」を「語り手」に置き換え、「話体」という概念を提唱した。話体とは、「語り手」に帰属する修辭的な方策にとどまらず、「語り手」と「聞き手」の区分を横断する相互行為の構造的な特性をも包みこむ談話の表情なのである [菅原 2007: 263]。

【事例5】「私は嫉妬に狂い」[2005年8月5日]

この事例はSH（【事例2】のKKの長男）とGk（ガナ）という初老の夫婦への同時インタビューである。以下に掲載するセグメントでは、1987年に私自身も目撃した、この夫婦の大喧嘩の顛末について語ってもらっている [菅原 1993: 208-211]。喧嘩の原因はSHの婚外性関係（ザーク *dzāā-kú*）であった。Gkは夫の相手になった女が自分の姻族であったことが彼女にとって恥辱であったという論理を展開する。TBは調査助手タブーカである。

Gk: [前略]「私の親族の男の『妻だったのよ』」

SH: 「妻だったのよ」
と} 彼女は言った。そんなわけで、われわれ [男女二人] は喧嘩した。

SG: そのときGkはどう思ったのか？おまえさんはどんなふうに嫉妬に狂ったのか？

Gk: 私は嫉妬に狂い彼に言った。「そんなことをあんたがするんだったら、どうか私にクア [ブッシュマンの総称] の男の子を取ら

せてよ。あんたはクアの女の子を取ったんだから。今度は私がクアの男の子を取っても、あんたの心に痛みはないわよね。私があんたを独り占めするのをあんたは拒んだのだから、だから、あんたは私を独り占めにすることはできないのよ」と言って、クアの男の子を [取った。]

SH: }取り、}で、彼は、あの女の子を……

Gk: {ツォエをね }

TB: {ツアレガエンを}

Gk: アエー

ここで妻が語っているのは、夫が別の女と婚外性関係をもったことに腹を立て、そのツラあてに夫の姻族にあたるグイの青年と関係をもったという逸話である。彼女が、相手の青年のあだ名ツォエを用いて過去の恋人に言及すると、調査助手タブーカは気をきかせてツアレガエンという本名を明かした。私のよく知っている男である。しかし不覚にも、この事例に出遭うまでの18年間、私は、彼女とツアレガエンがそのような関係にあったことをまったく知らずにいたのである。何よりも興味ぶかいのは、語り手の夫SHが、妻と語りの共同制作をしていることである。上記セグメントの前から、夫は妻の発話の語尾をひきとって復唱や補足を繰り返していた。さらにここで、妻とくだんの青年との性交渉から女の子が生まれた、という重要な情報を付加したのである [菅原 2007: 260-262]。

日本の常識では夫婦のあいだで昔起きた婚外の性にまつわる深刻な葛藤をあげすけに人に話すといったこと自体が稀だと思われるが、グイの日常の会話場ではけっして珍しいことではない [菅原 1998a]。談話から立ちのぼる特有なスタイルを語り手の人格特性に帰すことは的はずれである。上記のような事例は、性愛に身を処すグイのやりかたを貫いている一般的態度の一トークンとして了解する必要がある。

6 忘却——「不在の穴」の輪郭

同一のフィールドで長い年月にわたって調査を続けること自体が、そのつど解明すべき個別的な研究テーマを超えた思いがけない副産物をもたらす。それは、現地の人びとと調査者とが多様な出来事に関わる記憶を交叉させるということである。そこから共同想起を動機づける認知的リソースが蓄積される。以下の事例は、2004年と2005年に試みた「フィールド実験」から得られたものである。1989年に分析した日常会話のなかに、私の住んでいたキャンプの女たちが過去の出来事を再現して語り合う場面がいくつかあった。15～6年が経過したのちに、同じ話者へのインタビューを行い、私のほうから呼び水となるようなヒントを与えて同じ出来事を語りなおしてもらったのである。

【事例6】「ああいうことを忘れてる」（2005年8月23日）

16年前、当時4人の子の母であったNbは、老齢の母親とおしゃべりの中で、彼女たちの身近な親族である若い女2人が父親の不明な子どもを生んだことを嘆きあっていた。その1人がNbの類別的な妹ドエであった。妊娠が発覚したあと、ドエは周囲の親族たちに赤ん坊の父親が誰であるか頑として打ち明けなかった。調査助手タブーカが疑われ、彼は「あんたたちは、おれのしてもいないことで、おれを監獄に送るのか」と抗弁した。このことから、「濡れ衣を着せる」ことを意味するカラハリ語（ツワナ語の方言）の動詞パキリーザが、赤ん坊の名前の候補として人口に膾炙した。診療所で新生児の名を看護婦から訊かれたドエは、同行したNbたちに「あんたたちが言った名前は何だった？」と尋ねたので、Nbは呆れた。「なんで私たちがあんたの赤ちゃんの名前を知っているのよ？」[菅原 1998b: 163]。16年後のインタビューで私はこの逸話をNbに再現させることを試みた。この場には、タブーカ(TB)のほかに、もう一人の調査助手カーカ(KA)がいる。

SG: けれど、あんたはパキリーザという名を憶えていないか？ タブーカの…。

Nb: パキリーザね。私はそれを憶えている。私はよく——そういうふうに私はよく彼女を呼んだものよ。

TB: どういうふうにしてあんたたち〔女二人〕は彼女をパキリーザと呼んだのか、その話をおれたちに与えよ。

Nb: エー¹³⁾、エー、たしか——彼女——彼女はうまく運んだ〔「安産だった」の意〕の、で、すると別の男がやってきた。それで、そのことで私たち〔女〕はそれで思った。まあ、濡れ衣を彼は着せられたんだわ。あんなふうに彼がしているってことは。このように、私たちはそれで思ったのよ。で、その名を呼んだの。

SG: 診療所に行ったとき、看護婦は男の子——男の子の——あるいは女の子の【KA: 女の子】女の子の名を尋ねなかったか？

KA: で、病院に行って、で、行くと、その女の子の名を尋ねられなかったのか？

Nb: 私たち〔女〕——私たちは、私たちは昔、行って、で、彼女の名を尋ねられたわ。で、このように言った。病院の人たち〔女〕の所へ行ってやって来ると、彼女たちは私たちに尋ねた。私たちは言った、「彼らは——オジもいません」そう私たちは言った。「そういうふうだからあんたたち〔女〕は[どう]呼べるのでしょうか？」

TB: アエ、幼い子のお話のシッポみたいなことをしゃべってる(苦笑)。

Nb: アイー、アイー。

KA: で、ただ呼んだ。

Nb: [父親は] だれもないんだから、私たちは呼んだのよ。アイー、アイー。

SG: エヘーイ。アエ、年長の女の人はものごとを忘れてる。

TB: ああいうことを忘れてる。

Nb: ああいうことを忘れてるわ。でも、こんなふうだったわ。そう話しているわ。

Nbの発言で言及されている「彼」とか「彼ら」が誰を指示しているのかは不明である。語り手と私と調査助手のあいだで交わされるかなり複雑な交渉から、いかにもぎくしゃくとした語りの表情が立ちのぼってくる。彼女は明らかに過去にタブーカが行った抗弁や診療所での出来事を忘れていたのである。語りの分析から出来事を再構成することを企てるあらゆる研究にとって、「忘却」とはきわめて臨界的な問題である。なぜなら、それは「過去はどこに存在するのか？」というもっとも根本的な問いを招き寄せるからである。もしも、過去の出来事はその出来事への参加者の記憶として今も存在していると考えるならば、忘却とは非-存在あるいは無と同じことになる。しかし、この結論は、【事例6】に定着されている、われわれが「直接身体的におたがいの面前にいた」場の構造それ自体と矛盾する。この場には、私を含め「彼女は忘れていた」ことを発見する他の参加者、何よりも一番の当事者タブーカがいる。出来事は参加者自身に保存されている記憶としてだけでなく、彼（女）を発話原点として繰り返され続ける、その記憶の再現=表象を志向するすべての談話において存在しているのである。リクールは「歴史」について次のように述べる。

客観性の信条は、さまざまな歴史によって述べられる事実が互いにつながりあうことができ、そしてそれらの歴史の結果は互いに補完しあえる、というこの二重の確信にはかならない。[リクール 1987: 307]

これから書かれるべき『原野の人生』とは、無文字社会の「歴史」を実証主義的に再構成することを目的とするものではない。それゆえ、私は、リクールが「客観性のクレド」と呼ぶような確信に与することはできない。しかし、談話においてこそ事実が互いにつながりあい、複数の人びとに分けもたれた記憶が互いに補完しあえるということこそ、過去に照準をあてた民

族誌をヨクナパトファ・サーガから隔てる足場になりうるのだ。この談話を彩るぎくしゃくとした表情こそ、事実のつながりあいや補完、あるいは逆にそのあいだに見出されるかもしれない不整合や矛盾を具現している。さらに付け加えれば、この場面の背後には、かつてパキリーザと命名されそうになった女の子がすくすく大きくなったという、紛れもない実存の歩みがひそんでいる。あの診療所での事件から5年が過ぎた1994年に、私の滞在するキャンプを訪れたおてんば少女の顔を見て、私が「なんだ、おまえにそっくりじゃないか」とタブーカに言うと、彼は「ああ、あれはおれの子だ」とあっさり認めた。こうした事実もまた、語り手のぎこちない表情とつながりあい、忘却という「不在の穴」[高木 2006: 55]の輪郭をうかびあがらせるのである。

IV 過去とは何か／時間とは何か——討論

最後に、事例に則した上記の分析をふまえて理論的な問題を展望する。過去の出来事を照らす民族誌を書く、という目標を掲げたたん、私たちは、「フィールド哲学としての人類学」[菅原 2002b: 20-23]にとってもっとも困難なアポリアに直面する。それは、「過去とは何か」ひいては「時間とは何か」という難問である。よほど周到な準備をしないとこの問いに答えることはできないが、現時点での見通しを大雑把に述べる。

1 流れ／沈下の隠喩から離脱することは可能か

この主題について考えるとき、私に強迫観念のように取り憑いてきた小説の一節を必ず思い出す。老いたシャンスラードはバス停で22歳の女子学生にこう語る。

[[前略] 昨日、わたしは二十二だった。この、ベンチに腰かけて、バスを待っていた。映画に行くためか、それともデパートで

レター・ペーパーを買うためにね。そのときは、こんなふうだとは思っていませんでしたよ、こんなにあっという間だとは。これがいわゆる——人生っていうやつだ。人生！そんなものはほんの一時間も続きゃしなかったんだ！バスが行って、つぎのが来るまで、ちょうどそのあいだだけ……ほんとに……〔後略〕〔ル・クレジオ 1969：255〕

私の青春に不幸と呼べることがあったとすれば、この一節に震撼し、これこそが人生の真実なのだ、と心底思いこんだことだ。そして、今、私はシャンスラードとさして変わらぬ年齢にいる。そこで問う。彼の洞察は正しいのか？それを明らかにすることが、本論のもっとも基本的な動機づけであったといってもよい。

まず、ベルクソンが提起した「逆円錐体モデル」は大きな手がかりを与える〔ベルクソン 2007：218, 232〕。このモデルの卓抜なところは、円錐の先端がつねに現在という平面に突き刺さり続け、そこに主体がそれまで培ってきた能力のすべてが凝縮されるということである。この瞬間においてこそ、環境のアフォーダンスを検出するというヒトと他の動物とに共通した活動が実現されていると考えることができる。もうひとつ、逆円錐の底面をなす「純粹記憶」とは「過ぎ去った人生の场景のすべての細部をわれわれの精神がそこで保存するような」平面である〔ベルクソン 2007：344〕。もちろんこれは理論的構成体であり、脳や身体はどこかに「純粹記憶」が実在していると考えすることはできない。私はベルクソンが「純粹記憶」と呼んだ何ものかを「直接経験の総体」として捉えなおしたい。私がフィールドにおいてグイの語りを収録している「現在時」において、私と語り手とは相互行為の場に直接的に共在している。さらに、この共在が繰り返されるならば、われわれの直接経験という「底面」はそれに応じて多少なりとも拡大してゆくことになるだろう。

私がベルクソンの逆円錐体モデルに強く惹か

れるもっとも大きな理由は、それが反＝流れのモデルであるからだ。「時間の流れ」なる「もの」が存在すると思うのは錯覚である。それは、川の流れという直接経験を疑わない文化が発明した隠喩の産物だ〔Lakoff & Johnson 1999：158-159〕。生きること、世界を知覚すること、そして意識——これらすべては切れ目なく連続する変化である。ハイデッガーが「時間性」と名づけた現存在の根本条件である変化それ自体を、私たちはけっして知覚することも認識することもできないので、隠喩に頼らざるをえないのである〔ハイデッガー 1994〕。

もうひとつ注意しなければならないことがある。グイ語には「時間」という抽象概念を表す語が存在しないのだ。「時刻」を表すナーコ(*naako*)という語はたまに用いられるが、これはツワナ語からの借用である。グイの生活世界に忠実であろうとすれば、私たちもまた「時間」あるいは「過去・現在・未来」といった概念をまったく用いずに、時間について考えるという離れ業に挑まなければならない。

ここで、「川」が存在しないカラハリの原野に立脚した反＝流れモデルを構想したい。以下は、すべての動物にとってもっとも根源的な「歩く」という活動に根ざした隠喩によって「時間」を捉える試みである。その前提になるのは、中川が明らかにしたグイ語の時制である〔中川 1993〕。時制標識は、通常、主語と相標識の直後に置かれる。一昨日より前：*qx'ó*（遠過去）／昨日：*c'u*（近過去）／前夜から日の出まで：*ŋü*（非常に近い過去、「たった今」の意でも用いる）／今日の朝から現時点までの過去：*ki*（さっき）；今日の未来：*hü*（ちょっと先）／明日未来：*ɔisi*（近未来）／あさって以降：*qx'āwā*（遠未来）。

以上から明らかなように、グイの時制は厳密に太陽の運行と対応しており、「流れ」の隠喩とは無縁である。太陽の運行と「歩く」ことを重ねれば、日が空にあるときは歩き、日が沈んでからは「すわる」または「横たわる」とい

う原型的な活動モデルが得られる。この反復に据えれば時間はどのように把握されるのだろうか。

日本語に範をとって、歩くことにおいて時間を捉えるならば、私が山小屋に着く未来は私の前にあり、谷川で水を飲んだ過去は後ろにある、と考えるのは自然に感じられる。しかし、日本語では時間的な前後関係は、「未来は前にあり過去は後ろにある」という身体感覚とは逆転した「まえに」「あとに」という副詞句で表現される。「山小屋に着くまえに水を飲んだ」「日が暮れたあとに彼女と会おう」。あるいは少年が別の少年の家に誘いに行く。「カズくん、あっそぼ～」「あ～とで」。カズくんがケンくんと一緒に遊ぶであろう未来はカズくん前方にあるはずなのに、カズくんはなぜ「ま～えで」とは言えないのか。この矛盾はきわめて深遠であるが、全面的に解明することは今後の課題としたい。

では、グイはどうなのか。グイ語では、「昔」のことをカイクリ (*qx'ai-kiri*) と言う。クリは「年」を表す。カイク (*qx'ai-ko*) は顔のことであり、明らかに身体的な前方を表す。ちなみに「ク」は「中」を表す名詞派生辞である。また、時間的な「まえに」「あとに」をそれぞれカイクヤ (*qx'ai-ja*)、カイクカ (*k'áo-ká*)¹⁴⁾ と言い、日本語と同じく身体前方と後方に対応する。中川 [私信] の教示によれば、カイクの意味場の中心は「遠く」であるという。「遠くの年」だから「昔」なのである。だが、そうだとすると、なぜ「顔」が「遠くの中」なのか説明することが困難になる。あまりに過剰な解釈かもしれないが、鏡が存在しなかったカラハリの原野においては、自分の顔こそはけっして見ることのできない「遠さの中心」だったのかもしれない。

いずれにしろ、グイ語において「昔」(過去)は「遠く」にあり、しかも(身体の)「前」にある。これを「歩く」という原型的な活動モデルと重ね合わせてみよう。歩く「おれ」は、昨晚泊まったキャンプで出会った女のことを思う。「過去

を思う」ことは、いったん歩みを止めてくるりと振り返り、すでに地平線の向こうに隠れてしまった昨日いた場所を見晴らす身体的なふるまいと等しいのではなかろうか。言うまでもなくこの解釈は私たちの「過去を振り返る」という隠喩と一致する。

私は当初、受賞記念講演の副題を「サルベージ人類学の逆襲」にしようかと思っていた。しかし、サルベージという語は、「流れ」とともに私たちの思考を制約するもうひとつの隠喩すなわち「沈下」に基づいている。これこそフッサールがその有名な時間論で提起した図式の核心である。連続的变化を生きることは右方向への水平運動としてイメージされる。「左」側にある過去の一瞬一瞬は、主体の意識が「右」へ移行するにつれて、より深く下方へ沈みこんで行くのである [フッサール 1967: 38-40]。

ここで、老いたシャンスラードの洞察を再考したい。彼の人生は過ぎてみると「ほんの一時間も続きゃしなかった」。つまり、過ぎてしまえば「無」に等しかったということだ。そのシャンスラードも自分が人類の一員であることを認めるだろう。一要素としての彼の生は無に等しかったけれど人類という「種」は永遠に存続するということはあるだろうか。たとえ進化が「事実」であることを疑わない自然主義的な態度を保留するとしても、この問いに肯定で応えることは合理的でないと思われる。何よりも私たちは直接経験に基づいて永遠を思考することができないからである。すると「人類という種が消滅する未来がいつか確実に到来する」という命題が高い蓋然性をもって成立するだろう。人類が減びるときには、私たちが身を浸しているあらゆる関係のネットワークが消滅する。その「末期の視点」から振り返れば、人類史の総体が「無」であり、意味をもたない。

これはもちろんニヒリズムである。ニヒリズムを拒むべきア・プリオリな理由はないが、確信的なニヒリストであることと人類学にコミットすることとの間には、少なくとも実践倫理の

うえて深刻な齟齬が生じやすいだろう。簡便な代案を提示したい。すべてがやがては消え失せるという時間論を棄却しさえすればよい。シャンスラードを典型とするこのあまりにもお馴染みの時間把握は、「流れ」あるいは「沈下」という文化相対的な隠喩の産物なのである。過去は「過ぎ去った」のでも「沈んだ」のでもなく、今も原野の一点に実在する、私がそこから歩いてきた場所なのだと思えるならば、私たちはこの強力な隠喩から離脱することができる。もちろん、こうした想念は、時間を空間の比喩で捉えることに対するベルクソンの執拗な批判 [ベルクソン 2001] とは真っ向から対立する。おそらくそれは、ニーチェの永遠回帰の思想と何らかの類縁性をもつのだろうが [ニーチェ 1993]、その点に関する吟味も積み残しの課題である。ただ言えることは、過去の出来事を照らそうとする民族誌を書くことは、過去を喪失の相で語ることを拒否する態度に基づかざるをえないということである。語りの表情とは、「今ここ」の場に息づく、グイの人びとの生き方を貫く一般的態度であるかぎり、それを通路としてグイが生きてきた直接経験の総体をじかに「振り返る」ことはけっして不可能ではないだろう。

2 民族誌と小説、ふたたび

本論の副題とした「フィールドワークはどんな意味で直接経験なのか」という問いに答えることでまとめとしたい。文化人類学を専門的に研究していない一読者の視点からすれば、かのサンチェス一家 [ルイス 1969] よりもコンプソン家の人びとのほうがずっと生々しい存在感をもったとしても不思議ではない。読者がけっして出会うことのないであろう人びとの生のかたちをありありと描き出す。そのようなエクリチュールとして、優れた小説と良質な民族誌の間に本質的な差はない。「文芸」と「学術」という制度的な区別を除けば、両者は同じような企みをもったコミュニケーションの形式だとい

うことになる。だが、それが描き出す世界との関わりにおいて、小説と民族誌との間には決定的な隔りがある。

民族誌とそれが記述する現地の人びとの実在との間には厳密に指標的な連鎖がある。この連鎖をつねに支えているのがフィールドワーカーの身体である。彼（女）の身体が現地の人たちとの直接的な共在の場に巻きこまれていたというその事実から、さまざまな位相の「語りの表情」が生み出される。(a) 多くの場合、人類学者が民族誌を書くときに用いる言語は現地の人びとの母語とは異なるので、代替不可能な語の表情を伝えるべく彼（女）は苦闘する。(b) 共在の場には現地社会に特有なハビトゥスと間身体性が滲透している。(c) 語り手の身体動作によってこの場に思いもかけない身体配列が現成する。(d) 複数の語り手が相互参照されることにより現実の多面的な相貌が次々と開示される。(e) 語り手・調査者・調査助手は、その相互間で、あるいはかれらと言及対象との間で、文脈に応じて刻一刻と変化する仲間性を投網しあう。(f) 複数の語り手に跨がる相互行為の構造によって、実存的な問題に立ち向かい身を処する人びとの一般的態度が照らされる。(g) 語り手が過去のある出来事を忘却していることを露呈するとき、かえってその欠落の周囲に、事実の間の連結と記憶の相互的な補完とが浮かびあがる。

これらの特徴は何らかの理論的前提から体系的に演繹されたわけではなく、たまたま私が用いてきた方法から経験的に導き出されたにすぎない。それゆえ、別の方法を用いるならこのリストにさらに多くを付け加えることもできるだろう。もちろん、小説もまた文体や構成にさまざまな工夫を凝らすことによって、上記の特徴の幾分かを近似することはできる。だが、小説がその工夫を「創作の秘密」として秘匿するのに対して、民族誌はこれらの特徴すべてを「発話原点」にまで遡って逐一証拠を挙げて例証することができる。I章では、ヨクナパトー

ファ・サーガを例に挙げて、私は「虚構」と「事実」の区別を本質的な差異ではないとして、いったん斥けた。だが、上記の7つの特徴が生み出される母胎にはやはり事実がある。事実性に満たされた場人にびとと直接的に共在していたことこそが、民族誌に固有な特徴の根拠となる。あえて価値語を使うならば、これらの特徴を生み出す土壌は汲めども尽きない現実と知覚の「豊かさ」なのである。

だが、以上の議論は、小説に対する民族誌の優位性を主張するものではまったくくない。民族誌にはけっして「白痴」のベンの意識の流れを描写することはできない。フォークナーの想像力だけがそれを可能にした。何ら「実証性」を伴わないこうした知の冒険こそが、流れとしての時間という隠喩の呪縛から私たちを解き放ち、あらゆる瞬間が等価に存在している衝撃的な時間性に向き合わせるのである。そのことを確認したうえで、現実を経験することの代替不可能性を最後に指摘しておきたい。

3 現実世界の「豊かさ」

『響きと怒り』の終末でベンを乗せた馬車は町の広場にさしかかる。御者ラスターはいつも右に向けるはずの馬車をうっかり左に向けてしまう。ベンはパニックを起こし咆吼する¹⁵⁾。本論のもとになった草稿は職場の大学院ゼミのために用意したものだ。そのために久しぶりにこの小説を読み直し、ある啓示にうたれた。ベンには儀式的な同一性に固執しそれが乱されるとパニック発作を起こす自閉症者ではなかったのか。そのように考えると、「すべての瞬間が等価に存在している」彼の意識の独特なあり方も腑に落ちる。自閉症に特徴的な認知能力として注目されるのが、正確無比なカレンダー記憶である。精神医学エッセイで著名なサックスは、一日一日を巨大な織物に追加しそれを「見て」いるというイメージに託して、カレンダー記憶のメカニズムを推測している〔サックス1992:339〕。ベンの127回にわたる「時間跳躍」

もまた、単に「視線」の移動だったのかもしれない。

長男が自閉症児として生まれたことは、私の生に偶発的に起きた現実であった。現実の「豊かさ」の根拠とは「経験しなければわからない」ということである。その経験があればこそ、私はフィールドにおいて知的障害者の一人息子をもつXpおばさんから仲間性を投げかけられることもできたし、19世紀末のディープ・サウスに生まれむごたらしくも去勢された自閉症者の生の悲惨を忿懣やるかたなく想像するようになった。まだ「現実経験」に乏しかった青年期の私にはそんな想像は不可能だった。そう考えるとき、私は、改めてフォークナーへの畏敬の念に打たれる。彼が『響きと怒り』を書いていた1920年代には「自閉症」という病名さえなかった。自閉症の認知科学的な研究が飛躍的に発展したのはそれから半世紀以上も経ってからのことである。それにもかかわらず、彼は、同じ町に生きる「白痴」のふるまいに並々ならぬ関心を抱き、その障害の特徴を見抜いていたのである¹⁶⁾。現実と他者の底知れぬ深さに魅惑され「直接観察」を続けること。それは、人類学者にとってだけでなく、作家にとってももっとも貴重なリソースなのである。

最後に、受賞への感謝のしるしとして、今まで伏せていたことを公開する。本論ですでに明らかになったことだが、私は、小説こそを生の謎をもっとも鮮やかに照らす言語形式であると思いつけてきた。もう3年「まえ」になるが、SFミステリーを覆面作家として刊行した〔鳥羽2010〕。名誉ある賞を頂戴したことに忸怩たる思いがあるのは、セルトーのいう「隠れ仕事」にあまりにも長い時間を費やしたことへの後ろめたさのためである。ただ、民族誌とは異なる形式で、進化とセクシュアリティの謎を根源的に問い直す機会をもてたことは、人類学者としてけっして無意味ではなかったと思っている。もしも残り時間が充分にあれば、時間と歴史の謎を解き明かす作品も完成させたいと念じている。

謝辞

私をガイのもとへ導いてくださった田中二郎先生（京都大学名誉教授）にはどれほどのことばを連ねても感謝の念を表現できない。困難なフィールドワークを共にしたカラハリ調査隊のすべての方々に心からの謝意を表す。とくに、中川裕さん（東京外国語大学教授）の徹底したガイ語研究からは測り知れない援助を受けた。ただし、本稿にまだ言語学的な誤りが残っているとしたら、それはひとえに私自身の責任である。私の会話・談話分析をつねに励ましご指導くださった谷泰先生（京都大学名誉教授）、そして先生が組織された「コミュニケーションの自然誌」研究会のすべての会員に深い感謝の念を捧げる。最後に、「不肖の師」をいつも温かく見守り支えてくれた、わが「お弟子さん」たちにこの場を借りて篤く御礼を申し上げる。

注

- 1) 副題として「語りで紡ぐブッシュマン現代史」を予定している。
- 2) 私は、1998年から現在に至るまでに出版した著書・論文でガイ語を表記する際には、中川裕がその初期の調査に基づいて考案した正書法を用いていた [Nakagawa 1996: 121-122]。だが、その後、中川は複数の音韻学的な理由からこの正書法を改訂する必要性を指摘し、新しい表記法を提案した [中川 2004]。本稿では後者に従う。
- 3) 後述するように、ガイ語にはほぼ完備した人称代名詞のパラダイムがある。これを反映させて、男女双方を含む「かれら」と男だけの「彼ら」とを区別して用いる。
- 4) 『アブサロム、アブサロム!』巻頭の図に付された署名の下にこう書かれている
- 5) 「コツンと」は奇妙な訳だが、原文は“crying rigidly and quietly”である [Faulkner 1965 (1931): 263-264]。
- 6) すべての次元に代入される可能な値（典型的には [+/-]）が実際の語形変化として実現している場合を「完備パラダイム」(complete

paradigm) と呼ぶ。フィリピンのハヌノー語はその例としてよく引かれる [D'Andrade 1995: 32-33]。ガイ語はハヌノー語よりずっと複雑だが、一人称単数が性を弁別しないことだけが、完備性を損なっている。

- 7) ガイ語の親族名称体系においては、エゴの父母のキョウダイのうち、異性または父母より年長の者は「年長の親」を意味する *ciá/ú* という語で、同性で父母より年少の者は「小さい親」を意味する *//úú-/úú* という語で指示され、これに対応して呼称も変化する。また前者は祖父母にも適用される。
- 8) 「呼称逆転」という術語は、大野仁美氏からの教示による [大野 私信]。
- 9) 談話資料の転写で用いる記号は以下の通り。
〔 〕: 訳文に関する補足情報 / []: 原文にはない語句の補充 / () : 非言語情報の記述 / (-): 約0.5秒の沈黙 / あいーうえお: 言いよどみまたは言い直し / あいうえお: 発話と身ぶりまたは身体動作が共起している部分 / { } : 同時発話。
- 10) 「現成する」という訳語については別の所で詳述した [菅原 2013: 10, 35]。
- 11) 文法要素または品詞を表わす略号をアルファベット順で以下に示す。acc: 対格 / c: 通性 / dl: 双数 / f: 女性 / inc: 一人称双数・複数代名詞の包含形 / m: 男性 / nom: 主格 / PAST: 過去時制 / PGN: 人称・性・数 (接尾辞) / pl: 複数 / PRN: 代名詞 / sg: 単数 / 1: 一人称 / 3: 三人称。
- 12) 「人称空間」とは木村大治が提案した用語である [木村 1991: 181; 菅原 1998b: 59-62]。
- 13) 「エー」「アイー」は肯定を示す間投詞で日本語の「ええ」「うん」に近似できる。「エヘーイ」はそれらよりも強い肯定、「アエ」は軽い驚きや不審を表す間投詞である。
- 14) カオー語は「太腿の裏側 (の肉)」「後ろ半分」を意味する。
- 15) このシーンはシェークスピアの『マクベス』の一節に対応する。訳者解説に掲載された英語の原文を直訳すれば、「それはお話し／白痴によって語られ、響きと怒りに満ち／何も意味しない」。タイトルの「響きと怒り」はここから引

かれている。

- 16) 自閉症について書かれた最良の書物がある。著者ハートは少年時代に自閉症の兄に悩まされ、生まれた長男もまた自閉症児であった。彼は、息子の療育に全身全霊を傾けただけでなく、中年を過ぎた兄をも荒廃から救い出した。神経科学者ガードナーはこの本に寄せた序文を次のように結んでいる。——〔前略〕彼〔ハート〕は、ウィリアム・フォークナーがノーベル賞を受賞したときの、あの感動的な結びの言葉を、私たちに思い出させるのだ。「私は人間はたんに耐えるだけではないと信じている。人間はかならずや打ち勝つだろう」——〔ハート 1992: 15〕本稿の文脈では、この不思議な符合は偶然以上のものである。

参照文献 (アルファベット順)

ベルクソン、アンリ

- 2001 『時間と自由』中村文郎訳、岩波文庫。
2007 『物質と記憶』合田正人・松本力訳、ちくま学芸文庫。

Csordas, Thomas J.

- 2002 *Body/Meaning/Healing*. New York: Palgrave Macmillan.

D'Andrade, Roy

- 1995 *The Development of Cognitive Anthropology*. Cambridge: Cambridge University Press.

フォークナー、ウィリアム

- 1968 『アブサロム、アブサロム!』(フォークナー全集12) 大橋吉之輔訳、富山房。
1969 『響きと怒り』(フォークナー全集5) 尾上政次訳、富山房。

Faulkner, William

- 1965 *The Sound and the Fury*. Harmondsworth: Penguin Books. (first published 1931)

ゴッフマン、アーヴィング

- 1974 『行為と演技——日常生活における自己呈示』石黒毅訳、誠信書房。

ハート、チャールズ

- 1992 『見えない病——自閉症者と家族の記録』高見安規子訳、晶文社。

ハイデッガー、マルティン

- 1994 『存在と時間 (下)』細谷貞雄訳、ちくま

学芸文庫。

フッサール、エドムント

- 1967 『内的時間意識の現象学』立松弘孝訳、みすず書房。

今村 薫

- 2010 『砂漠に生きる女たち——カラハリ狩猟採集民の日常と儀礼』どうぶつ社。

木村 大治

- 1991 「投擲的発話——ボンガンドの〈相手特定しない大声の発話〉について」『ヒトの自然誌』田中二郎・掛谷誠(編)、pp.165-189、平凡社。

Lakoff, George & Johnson, Mark

- 1999 *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.

ル・クレジオ、ジャン・マリー・ギユスタヴ

- 1969 『愛する大地 (テラ・アマータ)』豊崎光一訳、新潮社。

ルイス、オスカー

- 1969 『サンチェスの子供たち——メキシコの一家族の自伝』柴田稔彦・行方昭夫訳、みすず書房。(新装版 1986)

丸山 淳子

- 2010 『変化を生きぬくブッシュマン——開発政策と先住民運動のはざままで』世界思想社。

メルロ＝ポンティ、モーリス

- 1967 『知覚の現象学1』竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房。
1979 『世界の散文』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房。

Merleau-Ponty, Maurice

- 1962 *Phenomenology of Perception*. Translated by C. Smith. London & New York: Routledge.

中川 裕

- 1993 「グイ語調査初期報告」『アジア・アフリカ文法研究』22: 55-92。
2004 「グイ語の正書法改訂案」『東京外国語大学論集』67: 125-130。

Nakagawa, Hiroshi

- 1996 An Outline of |Gui Phonology. *African Study Monographs, Supplementary Issue 22*: 101-124.

ニーチェ、フリードリッヒ

- 1993 『ツァラトゥストラ (下)』吉沢伝三郎訳、ちくま学芸文庫。

野澤 豊一

- 2010 「対面相互行為を通じたトランスダンスの出現——米国黒人ペンテコステ派教会の事例から」『文化人類学』75 (3): 417-439。

大江 健三郎

- 1974 『文学ノート——付=15篇』新潮社。

Ōno, Hitomi

- 1996 An Ethnosemantic Analysis of |Gui Relationship Terminology. *African Study Monographs, Supplementary Issue 22*: 125-143.

リクール、ポール

- 1987 『時間と物語 I』久米博訳、新曜社。

サククス、オリバー

- 1992 『妻を帽子とまちがえた男』高見幸朗・金沢泰子訳、晶文社。

菅原 和孝

- 1980 「ニホンザル、ハナレオスの社会的出会いの構造」『季刊 人類学』11 (1): 3-70。

- 1984 「狩猟採集民社会における個体間の近接と身体接触——セントラル・カラハリ・サンの事例から」『季刊 人類学』15 (2): 78-141。

- 1993 『身体の人類学——カラハリ狩猟採集民グウィの日常行動』河出書房新社。

- 1998a 『語る身体民族誌——ブッシュマンの生活世界 I』京都大学学術出版会。

- 1998b 『会話の人類学——ブッシュマンの生活世界 II』京都大学学術出版会。

- 1999 『もし、みんながブッシュマンだったら』福音館書店。

- 2000 「ボツワナの社会福祉——ブッシュマン社会における心身障害」『世界の社会福祉11——アフリカ・中南米・スペイン』pp.185-207、旬報社。

- 2002a 「身体化された思考——ガイ・ブッシュマンにおける出来事の説明と理解」『日常実践のエスノグラフィー』田辺繁治・松

田素二 (編)、pp.61-86、世界思想社。

- 2002b 『感情の猿=人』弘文堂。

- 2004a 「失われた成人儀礼ホローハの謎」『遊動民』田中二郎・佐藤俊・菅原和孝・太田至 (編)、pp.124-148、昭和堂。

- 2004b 『ブッシュマンとして生きる——原野で考えることばと身体』中央公論新社。

- 2006 「喪失の経験、境界の語りーガイ・ブッシュマンの死と邪術の言説」『ミクロ人類学の実践——エイジェンシー／ネットワーク／身体』田中雅一・松田素二 (編)、pp. 76-117、世界思想社。

- 2007 「身体資源と〈性のトポグラフィー〉」『資源人類学01 資源と人間』内堀基光 (編)、pp.241-267、弘文堂。

- 2013 「身体化の人類学へ向けて」『身体化の人類学——認知・記憶・言語・他者』菅原和孝 (編)、pp.1-40、世界思想社。

高木 光太郎

- 2006 「「記憶空間」試論」『社会空間の人類学——マテリアリティ・主体・モダニティ』西井涼子・田辺繁治 (編)、pp.48-64、世界思想社。

田中 二郎

- 1990 『ブッシュマン——生態人類学的研究』(初版1971)、思索社。

- 1994 『最後の狩猟採集民——歴史の流れとブッシュマン』どうぶつ社。

Tanaka, Jiro

- 1996 The World of Animals Viewed by the San Hunter-gatherers in Kalahari. *African Study Monographs, Supplementary Issue 22*: 11-28.

鳥羽 森

- 2010 『密閉都市のトリニティ』講談社。

Varela, Francisco J., Evan Thompson and Eleanor Rosch

- 1991 *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience*. Massachusetts: The MIT Press.

(2013年10月16日採択決定)

A Long Way toward *Life in the Wilderness* In What Sense is Fieldwork an Immediate Experience?

Sugawara, Kazuyoshi

Keywords: immediate co-presence, G|ui/G||ana, expressive gesture in narrative, body configuration, co-membership

This article, based on my research extending over more than three decades concerning the G|ui former foragers in Southern Africa, considers how anthropological fieldwork can be an immediate experience. The G|ui and G||ana are closely-related dialect groups of Khôe-speaking people who have adapted to the harsh, dry environment of the Kalahari Desert. The point of departure for this investigation is the Goffmanian theory of microsociology that regards immediate co-presence as the most basic foundation for elucidating the structure of human face-to-face interactions. At the same time, special attention has been paid to William Faulkner's "Yoknapatawpha Saga," especially *The Sound and the Fury* and *Absalom, Absalom!*, since his avant-garde style and its unique temporality, among other factors, provide valuable clues for writing an ethnography that attempts to reconstruct past incidents.

The strategy of the ethnographic descriptions I am pursuing is to grasp the oral discourse as some kind of 'gesture' and to illuminate the emotional expression emerging from it. The strategy is inspired by the thinking of Maurice Merleau-Ponty, who regarded spoken words as "a genuine gesture" rather than the reproduction of mental representations. My analysis focuses on six cases involving formal interviews with seven persons (three G|ui men, a G|ui woman, a G||ana woman, and a married couple consisting of a G|ui husband and a G||ana wife) that had been recorded and videotaped from 1994 to 2005 at the Xade settlement in the Central Kalahari Game Reserve and the New Xade relocated village, both in Botswana. The cases cover such diverse ethnographic topics as a male initiation ritual, courtship, the death of the narrator's child, the experience of raising a mentally-retarded child, extramarital sexual relationships, and the birth of a baby whose father was unknown.

For analytical tools, I relied on such well-known concepts as Bourdieu's habitus, Merleau-Ponty's intercorporeality or style, and the 'enact/enactive/enaction' proposed by Varela et al. I also used two kinds of conceptual schema that I had proposed elsewhere, namely 'body configuration' and 'co-membership.'

As for the first, the human perception of any incident is based on a particular body configuration whose substance consists of postural and/or proxemic arrangements, or peculiar patterns of interaction between participants. Through the iteration of recounting a past incident, the body configuration is crystallized into a relatively invariant mental image that reifies the 'core' meaning of the incident.

As for the second, in speech act theory, an 'assertive' family of illocutionary acts deserves special attention, for an act of assessment always entails a triadic relationship among the speaker, hearer, and referent. The assessment value of an utterance varies according to how the speaker and hearer, respectively, cast the 'net of co-membership' to any one of three possible dyads constituting the above triad: namely, speaker/referent, hearer/referent, and speaker/hearer.

The following seven points were abstracted from the discourse analysis of the above six cases:

- When some kinship address terms, such as “grandpa” or “gandma,” are used as interjections, expressive tones become prominent that are irreducible to formal semantics.
- The scene of immediate co-presence, in which both the G|ui (G||ana) informant and the researcher participate, is immersed in the habitus (or inter-corporeality) peculiar to their societal lives.
- The bodily action of a narrator ‘enacts’ some unique pattern of body configuration that symbolizes the essential meaning of a past event, such as a ritual.
- In an interview with one informant, the multiple facets of reality are illuminated through cross-referencing to another informant’s discourse on the same past incident.
- Both the narrator and researcher keep casting a ‘net of co-membership’ to themselves and the referent of a statement in a way that varies according to the discursive context. For example, when the narrator categorized herself and the researcher as co-members by means of the first-person pronoun using a dual/inclusive form, on the grounds that both were the parents of mentally-disabled sons, the latent referents (i.e., the sons) were expelled from the co-member category and instead lumped in the separate category of formidable ‘things.’
- The narrative ‘style’ is not only informed through the rhetorical devices used by a narrator, but also through the interactive organization between two or more narrators. That style reveals the general attitude permeating people’s practices of coping with existential problems such as sexuality.
- It sometimes becomes evident that the narrator has forgotten a past incident. The loss of memory does not merely disclose the absence of the past in the now-and-here context. Rather, the negotiation involving the narrator, researcher and research assistants sheds light on the connection between multiple facts, as well as the mutual complementary to the memories of those participants.

Based on those analyses, it is argued that ethnographies and novels differ in terms of their engagement with the world, despite sharing the common goal of vividly depicting people’s ways of living. An ethnographic description is rooted in the indexical adjacency between itself and the reality of the narrator (or the speech-origin). The chain of adjacency is ultimately grounded in the researcher’s body that has been involved in immediate co-presence with the people. In other words, the source of the lifeblood of ethnography consists of the inexhaustible ‘affluence’ intrinsic to the factuality of people’s lives.